

京都のけずについて

京都は東京など他大都市のように城下町から
生れた町ではありません。その最初から天皇の
住宅中央として作られた計画都市であらうのです。

それ故に諸國郡雉がこぞも上京し、千部京都
には常に政争と戦火の人間ドラマが渦巻いて
きました。この都念の歴史にまじくくしくと抜
かれた京都人がエリート意識と不屈の根性、人
間としての美し、情愛を意識の底に堆積さ
せてきたのは歴史の必然なところであらうと
思う。

京都人は村的因襲や、外界の監視、周囲の
中傷や干渉がまじくくしくと、主体性を消滅させ、客
観的精神の持ち主にならなくなりました。そして
社交上の礼節を重く、他人のプライドを尊重し、
しかも人間関係の持続と断絶が自由にでき、本質
は決して排他的ではなく、伝統と前衛を具え、
考え方はインテリゲンチヤで、マクロ的視野を持つて
いるのです。

京都人には「ずが」といわれる。

長歴史に訓練された京言葉には、礼儀正しく
しな言葉や、おかしな「おかし言葉」が多くあ
る。ずは「全部」を指す。京都弁にはお互
いの中心を通じあうのが多い。

「まあ、お漬物で...」と、京都人が勧める
言葉も一種の社交用語です。

客が「お漬物」(食事開始)に誘われ、気が
付いた場合に、それを伝える方法です。
お漬物を勧める事は、実は客への好意を示す
こと。客は元の好意を汲み取り、えん
曲に断る。早々に辞志するのを「すげ」と言う
わけ。

「すげんお断る」に似て、お漬みの
客を大切にすると同時に、未知の人に警戒心を
弛めぬことの現れでもある。

京都指や飲食店では、お漬みの客を身内
のよう大切に。盗難や火事、けいさく、
とんぼりなど。店の品物を盗む人が、
お漬みさんが迷惑する事のおいふに気を配る。

京都は昔から女性の商人が多くと云われて来た。
お茶屋や金貸利づぐの所は、女所帯が特に
多く、トラブルをかける用は、当然の事では
ないか。

私の見たところでは、氣心の分らぬ、ほめてお茶屋さん
に對しては、心からの行届におおむて聲が出来ず
涙氣があるとは津波あゝとの氣づかから出た言葉
だとういふ事だ。

京都の人は理屈をきらふ、長年の経験と
習慣に従ふ常識的に物事を処理する。
常識的判断の鵜くべき正確さは、祖先から
伝わる経験が教える感、あざす。
物事の結末を直感的に洞察して誤らぬ
才能と知恵がある。直情を知性でおさへ
長年の一歩を破壊しようとする相手と
心では許さぬ一歩にのみ。
この精神的な防衛及心づけす、の
本質であると思ふ。